

主日礼拝説教「借金帳消しの秘策」

日本基督教団石神井教会 2017年9月24日

【旧約聖書日課】創世記 45章1～15節

¹ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいらなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。²ヨセフは、声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。

³ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。

⁴ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。⁵しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。⁶この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。⁷神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。⁸わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。」

⁹急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。『息子のヨセフがこう言っています。神が、わたしを全エジプトの主としてくださいました。ためらわずに、わたしのところへおいでください。¹⁰そして、ゴシェンの地域に住んでください。そうすればあなたも、息子も孫も、羊や牛の群れも、そのほかすべてのものも、わたしの近くで暮らすことができます。¹¹そこでのお世話は、わたしがお引き受けいたします。まだ五年間は飢饉が続くのですから、父上も家族も、そのほかすべてのものも、困ることのないようになさなければいけません。』¹²さあ、お兄さんたちも、弟のベニヤミンも、自分の目で見てください。ほかならぬわたしがあなたたちに言っているのです。¹³エジプトでわたしが受けているすべての栄誉と、あなたたちが見たすべてのことを父上に話してください。そして、急いで父上をここへ連れて来てください。」

¹⁴ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。¹⁵ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた。その後、兄弟たちはヨセフと語り合った。

【使徒書日課】ヤコブの手紙 2章8～13節

⁸もしあなたがたが、聖書に従って、「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです。⁹しかし、人を分け隔てるなら、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によって違犯者と断定されます。¹⁰律法全体を守ったとしても、一つの点でおちどがあるなら、すべての点について有罪となるからです。¹¹「姦淫するな」と言われた方は、「殺すな」とも言われました。そこで、たとえ姦淫はしなくても、人殺しをすれば、あなたは律法の違犯者になるのです。¹²自由をもらす律法によっていずれば裁かれる者として、語り、またふるまいなさい。¹³人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。

【福音書日課】 マタイによる福音書 18章21～35節

²¹そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」²²イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。²³そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。²⁴決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。²⁵しかし、返済できなかつたので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。²⁶家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。²⁷その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。²⁸ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。²⁹仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。³⁰しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。³¹仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。³²そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不屈きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。³³わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかつたか。』³⁴そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。³⁵あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

「借金を返せ！」

教会の外掲示板に一週間掲げられている今日の説教題「借金帳消しの秘策」を見て、ここに飛び込んでこられた方があったならば、がっかりさせることになるかもしれません。返済できずにいる借金がある方、あるいは、返済しなくてもよい借金を手に入れようとしている方は、別のところをお訪ねいただいたほうがよいでしょう。たしかに、教会には、借金の申し込みに来られる方が、絶えません。だれがお聞きになられているか分かりませんから、ここでは、「教会ではお金をお貸しすることはありません」とはっきり申し上げておきますが、そのように言いながら、わたしどもは逡巡するところがあるのです、「本当にそれが、主イエスの教えに沿った判断なのだろうか」と。

今日の福音書で主イエスがお語りになられているのは、もちろん、金の貸し借りはどうあるべきか、といった教えではありません。金の貸し借りのたとえを用いて、「罪を犯した者を赦すべきこと」をお教えになられているのです。けれども、このたとえに限らず、主イエスは、罪の赦しの問題を、しばしば、金の貸し借りに関する言葉でお語りになられるのです。たとえば、わたしたちが礼拝で必ず唱える「主の祈り」には、「我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、我らの罪をも赦したまえ」という祈りがありますが、これはもともと、「罪」ではなく「負い目(=借金)を赦してください」(マタイ 6:12)という言葉で祈るように主イエスがお教えになられたものです。「誰かに対して罪を犯す」というのは、その人に借りができること、貸し借りの関係に置かれること、ということなのでしよう。

「七の七十倍までも赦しなさい」

たしかに私たちは、お互いの間で、お金の貸し借りはなくとも、心理的には随分たくさんのお金や借りを貯めこんでいるものなのかもしれません。そして、できれば、貸し借りが帳消しになるようにバランスを取ろうと、意識して、あるいは無意識のうちに、行動しようとするものです。たとえば、贈物のやり取りなどは、贈る側も贈られる側も一方的になることを避けようとして、どこまでもお返しもし合いが続くなどという滑稽なことが起こります。それが目に見える物であれば、そのように振る舞うのはごく自然なことです。ところが、それが、相手のための手助けのような行動や言葉のやり取りになると、自然にバランスを取ることがうまくいかない場合が起こってくるようです。往々にして、「誰かにしてもらったこと」は忘れても、「誰かにしてあげたこと」は忘れることがないとか、逆に、「誰かにしてしまったこと」は忘れても、「誰かにされたこと」は忘れることがない、というようなことが起こるのです。そのようなことが、わたしたちの人間関係では、常に起こっているのではないのでしょうか。

そのような互いに対する貸し借りの意識を日々積み上げながら、わたしたちは、互いに対する関係を築いていこうとしているのかもしれません。ところが、そのような人間関係における貸し借りの感覚は、必ずしも、だれもが同じというわけではないのです。それぞれの人生経験に基づいて、異なる感覚を持つようになっていく。だからこそ、その感覚が同じような人とだけ付き合いを続け、感覚が異なる人とは段々と疎遠になり、関係を持たなくなってしまう、ということ、わたしたちは無意識のうちにおこなっているのではないのでしょうか。

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」と、弟子のペトロは主イエスに問いました。そのように問うたのは、ペトロが、普段それほど頻繁に付き合う必要がない他人との関係を考えていたからではなく、日々付き合っていかなければいけない人、殊に主イエスのもとで「神の家族」の交わりに加えられた仲間同士の関係をどうしていったらよいかということを考えざるを得ない現実に向き合っていたからなのでしょう。そして、それはまた、ペトロらが主イエスの復活を経験した後、共に歩むようになった教会という「神の家族」の交わりの中で、信仰の兄弟姉妹同士の関係をどうしていったらよいかに悩んだ人たちの問題意識へと受け継がれて、福音書にこのように伝えられることにもなったのでしょう。

主イエスは言われました、「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」。7の70倍は490回です。わたしたちは、もしかすると、キリストに従う者として、490人の赤の他人を赦したり、あるいは一方的に与えることは、できるのです。では、1人の人に対して490回赦し、一方的に与えなさいと言われたら、できるのでしょうか。難しいのです。その人との490回の関りの中で、できれば貸し借りのバランスを取りたいと考えるからです。ところが、それをしなさいと、主イエスはお教えになられたのです。もちろん、491回目も、492回目も、その後も赦しなさい、とお教えになられたのです。

返さなくてよい、だから、与える

「しかし、そんなお人好しは、世の中では通用しない」と言われるかもしれません。「そう。だから、主イエスの赦しの教えも、教会の中や家族・身内の関係でのことで、それ以外の者との関係は違う」と、割り切るべきなのでしょうか。割り切って、教会の内と外、家族・身内の内と外の線引きをはっきりさせて、主イエスの赦しの教えを適用すべき相手を限定したらよいのでしょうか。

そのようなやり方は、とても現実的で、教会や家族というような身内集団を守るのには都合が良いように思えます。

しかし、それは、主イエスのなさり方とは相いれないものです。主イエスは、条件を付けて「身内」と「外部」を分けられたのではありませんでした。むしろ、世間で「外部」に置かれていると考えられていた「徴税人や罪人、異邦人」と呼ばれるような人々を、家族のように扱い、ご自分の食事の席に招き入れられたのです。「敵を愛しなさい」と教えられて、「外部」に立って「身内」であることを拒む者のことをさえ、「身内」同様に扱うようにと、教えられたのです。

主イエスは、「天の国は…」と、借金帳消しのたとえをお語りになりました。天の父の御心は、あなたが受け入れるべきすべての人のことを、どこまでも赦し続けることにあると、主イエスはお示しになられたのです。天の父があなたのことを受け入れ、どこまでも赦し続けてくださるのだから、あなたも互いに対してそうしなさい、というのです。

このたとえで、主君は一万タラントンの借金のある家来が、返済の猶予を願い求めたのに対して、猶予ではなく帳消しを宣言しています。天の父がしてくださるのは、借りの返済の猶予ではなく、帳消しです。貸し借りに基づく関係の破棄です。もう、お互いに貸しや借りに基づいた関係を積み上げることが、やめるのです。それが、天の父の御心、わたしたちが互いの間で始めるようにと促されている新しい関係です。それは、貸し借りのバランスでは成り立たない、いいえまったく一方的に与えられるばかりのところ成り立っている関係、つまり神とわたしたちとの関係、そこから始まる、互いの関係です。その与えられている恵みがあまりに大きいので、わたしたちは、互いの間にあった貸し借りを、もはや勘定しても仕方ないのです。互いの中の貸し借りではなく、自分が与えられている大きな恵みをただ分け与え、分かち合うことによって造り上げられる関係です。

そのような関係づくりを、わたしたちは、教会の交わりの中から始めるのです。神の恵みを確かめ合い、憶え合う教会の交わりの中でこそ、そのような関係づくりを始めることができるのです。それは、しかし、今見えている教会の枠組みの中に留まらないでしょう。越え出ていくのです。いいえ、「教会」の枠組みが、教会の内からの「新しい関係」という力を得て、外へ外へと押し広げられていくのです。すべての人と人との関係が、新しい「恵み」から始まる関係に変えられ尽くすまで、この営みは続けられるのです。そのために、今教会に集められているわたしたちは、他の人たちよりも一歩先に神に選ばれ、召されて、この関係づくりの営みに加わるようにされているのです。